

関西弁自主学习サイトの開発  
 DEVELOPMENT OF A WEB BASED MATERIAL FOR SELF-STUDYING THE  
 KANSAI DIALECT

新宮育枝 (マサチューセッツ工科大学)  
 Ikue Shingu, Massachusetts Institute of Technology  
 畑中淳子 (テキサス大学オースティン校)  
 Junko Hatanaka, The University of Texas at Austin

本発表は、日本で「最も強い」方言といわれる関西弁を題材に、学習者が授業外で自分のニーズとペースに合わせ、楽しみつつ文法知識および聴解力を養い、かつ地方アイデンティティをも考察できる英語媒介のオンライン教材のプロトタイプを開発した、その経過報告である。この教材は英語圏で日本語初級文法を履修済みの学習者を対象とし、関西圏への留学や就業を控える者が準備段階で関西言語及び文化への理解を深める事を目標としている。この教材の特徴は、オンライン教材の特典を生かし、口語である方言理解に必須の音声と関西話者の映像を例文・モデル会話及び聞き取り練習にふんだんに取り入れた点にある。ここでの手法は、他の地方文化・方言学習、ひいては日本語及び日本文化の多様性を学ぶ教材開発に広く応用可能であると思われる。

キーワード：関西弁、方言、文化、オンライン教材、聴解学習、自習

Keyword: Kansai dialect, Dialect, Culture, Online material, Listening comprehension, Self-learning

開発経緯

平成十八年度の来日外客者数は年間七百三十万人以上（日本ツーリズムマーケティング研究所調べ）と過去最高を記録し、それと同時に日本語学習者及び日本をビジネス目的、留学など観光以外の目的で訪れる外国人数も増加の一方であるが、彼らに対する日本からの情報発信は依然東京中心である。現在メディアで使用されている東京標準の日本語を学習者が教育機関でまず学ぶのは至極当然のことながら、学習者は日本で必ずしも共通語圏に滞在する訳ではない。地方の大学や企業に派遣された者や、地方でのホームステイを経験する者の中には学校で学習した日本語と日常接する実際の地方方言とのギャップに戸惑いを訴える者も少なくない。

地方方言の中でも学習者が最も遭遇しやすいのは日本で「最も強い方言」と言われる関西方言であろう。関西弁は大阪、京都、神戸などの主要都市を含む関西在住の二千万人強が話す地方方言の総称であり、標準語とは異なり独特の音韻体系、文法体系と語彙を保つ方言である（山下 2004）。最近では若年層に標準語の文法の影響を受けた方言つまり「ネオ方言」（真田 1996、真田他 2005）も浸透しつつあり、関西弁自体も時の流れにより変遷しているものの、その特徴は未だ現代関西人に広く強く受け継がれている。また方言はその地域の人々の対人接触・自己表現・思考・行動の各様式の表れ、すなわち地域文化を体現する物である（尾上 1999）が、中でも関西弁は話者の地方帰属意識に強く結びついた方言と考えられる。

メディアの影響もあり、関西圏外の日本人にとっても関西弁は聞いて十分意味が理解できる方言であるが、日本語学習者にとってはそうはいかないようである。関西方面の企業に2ヶ月から1年間インターンとして派遣されたマサチューセッツ工科大学の学生16名に行った2005年度のアンケート調査によると、職場外で地域の人々、特に年配者とのコミュニケーションがその方言の為難解であった経験を挙げた者が多く、派遣前に関西弁に関する知識または指導があればよかった、と答えている。また、関西出身の日本語教師であれば関西弁に興味を持った学習者から指導を依頼された経験のある方も多いであろう。更に近年、日本の映画やアニメ、テレビドラマにも方言、特に関西弁の出現度は上がっており、学習者が日本国外からもアクセスし教室での

日本語との違いに興味を持つケースもよく聞く。このように、関西弁学習へのニーズ、さらに地方文化及び方言一般に対する学習者の潜在ニーズはまぎれもなく存在すると考えられる。

では実際日本語の授業に地方文化や方言を組み込む事はどの程度可能であろうか。日本語教育界では近年5C、特に文化のカリキュラムへの組み込みが重視される中、様々な理由で地方文化あるいは日本語自体の多様性を教師が学習者に示す機会は非常に限られている。その理由としては、1) 東京発信の標準文化重視の傾向、2) カリキュラム内の時間的制約、そして、3) リソース及び教材の不足、などが挙げられる。つまり、まずは地方文化や方言自体を教師側が軽視しせざるを得ないのが現状である。また、方言を紹介するにしても方言を体系的に日本語文法と照らし合わせた信頼できる教科書やリソースもほとんどない。

カリキュラム内での取り扱いが困難であるのなら、方言に興味ある学習者が自習できる教材は存在するのであるか。関西弁に限ると旅行者対象の英語媒介の出版物およびウェブサイトは多少あるものの、いずれも日本語教育の見地からではなく、学生のニーズに応えるには質的にほど遠い感がある。また、日本で関西弁の聞き取り能力向上を目標とした教科書(岡本他 1998)が以前出版されたが、1) 媒介語が日本語のため中級以上の能力が必要、2) 構成が順不同で難解である、という点からこれも初級終了程度の学生のニーズに答える物とは言い難い。

以上のような点を踏まえ、日本語教師かつ関西弁ネイティブ話者でもある我々は、関西弁を題材に、学習者が授業外で自分のニーズに合わせて自分のペースで楽しみつつ文法知識および聞き取り能力を養い、かつ地方アイデンティティーをも考察できるような英語媒介のオンライン教材の開発に着手した。教科書ではなくオンライン教材の形態を選んだ理由としては; 1) 学習者が場所時間を問わず個々のニーズと自らの学習ペースに合わせて全世界からアクセス可能、2) 口語である方言紹介に必須の音声および自然発話を記録した映像の提示が可能、3) 教材の改訂、追加、アップデートが容易、4) 学習者の参加(関西での経験談、写真、映像の投稿など)も可能である事、等が挙げられる。単なる音声のみではなく映像を用いるのは、関西方言話者の属性やコンテキストによる社会言語学的要素も具体的に加味した総合的聞き取り教材を目指したいと言う意図からである。更に、最近インターネットの発達により学習者が対象言語(今回の場合は関西弁)のメディアに遠方からアクセスすることも比較的たやすくなってきている現状に対し、我々教育者としてまずしなければいけないのは、そういったメディアにアクセスする以前の基本的な事項を自ら学べる環境を作る事ではないか。このような意味も込めて、文法文化紹介ではなく実践に備え基礎を構築するツールとしての教材開発を目標とした。

#### プロトタイプ教材

関西弁自主学習サイトの開発に際しては、1) 東京標準の日本語文法との対照で関西弁文法を紹介する事、2) できる限り音声やビデオ映像で自然発話を提示する事、3) 学習者主導で楽しみながら学べる事、4) 学習者の関西文化への興味を誘発できる教材である事、などを念頭に次の七章を設定した。

- (1) 関西弁の歴史及び音韻・文法構造の特徴についての概要
- (2) 挨拶と日常よく使う表現の紹介
- (3) 基本文法(動詞、分末表現、形容詞、コピュラ、動詞のて形など)
- (4) 機能的文法(禁止・許可表現、命令形、「はる」敬語など)
- (5) 場面別聞き取り練習
- (6) 関西弁話者へのインタビュークリップを用いた聞き取り練習
- (7) その他の有用情報及び学生主導の情報を集めたページ

全てを通じ解説は英語とし、例文には関西弁特有のアクセントを示すため音声を添付している。

(1) は、まず関西弁と標準語の違いが短時間で把握できることを目的として、歴史的背景、日本での関西弁の位置づけ、関西弁と関西人の地方アイデンティティーの関わり合い等について触

れた後、更に音声・構造的特徴（文型）についての概要を述べている。（２）では、日常よく使う表現について標準語と関西表現を対比した上で、関西弁話者の挨拶を録画したクリップを随時提示した。

（３）と（４）では導入部分に対象となる文法構造を含んだモデル会話ビデオクリップを制作し用いている。そのビデオを通し学習者自身にその課の文型のポイントを推測させた上で、その後、文法説明、簡単な発話ドリル（３のみ）と、インターアクティブな聞き取り練習（イラストを動かして音声とマッチさせるものなど）及び、自然発話のクリップの聞き取り練習を提示し、一連の練習に取り組む事での基礎文型の定着を図っている。

（５）は、地方の商店街での買い物の際の会話など、実際に話される関西弁会話シーンのビデオクリップを使用した応用聞き取り練習である。自然な日常生活での会話を通して聞き取り能力をやしないつつ、教科書では学べないような日常語彙（品物の名称や独特の言い回しなど）や関西人のコミュニケーションストラテジーに親んでもらうのがねらいである。各クリップには語彙表を付け、簡単な多項目選択形式の内容質問を聞き取り練習として設定した。

（６）には、２００６年に関西弁話者計三十数人に行ったインタビュービデオをもとに、学習者が興味に合わせ個別の発話者または質問ごとにクリップを自分で選択・検索できるシステムを構築中である。質問は一般的な導入質問（年齢、好きな食べ物など）から、関西弁使用について（メールでの関西弁使用状況、など）、更には地方アイデンティティーを問うもの（標準語話者と関西弁話者の文化的相違など）までバラエティーに富んだものを設定した。複数の人々に予め設定した質問を用いてインタビューを行ったのは、同じ質問に対する複数の答えの比較を通して、学習者が同じ関西人でも話し方や意見に違いがあること（多様性）を理解できるようにする為である。インタビュー対象者を選定する際は、なるべく年齢、性別、職業、出身地にバラエティーが出るよう配慮した。また、最も関西弁の特徴がでるのは常体での会話であることから、可能な限りインタビュアーの近親者や友人にインタビューを行った。編集後のクリップは数秒から長くても２分以内で、各クリップのサイトには、そのクリップの聴解難易度、関西弁度（方言の強さ）を五段階で示し、更に聞き取りに必要な語彙表と学習者が自らの理解度を測るため多項目選択形式の内容質問も加えた。

最後に（７）は「学習者参加型のページ」を目標とし、実際関西を訪れた学習者からの意見や体験談、写真、ビデオ等を中心に構成する。また外国人から見て関西及び関西弁はどう映るのかを我々のフィルターを通さず示すため、関西在住のアメリカ人への英語でのインタビュークリップも掲載予定である。

開発の手順としては、まず日本でのインタビュービデオ撮りを行い、その後文法構造説明などの執筆及びそれに付随する音声録音・モデルビデオ録画と、インタビュービデオの編集、語彙表内容質問作りなどを並行して行い、まとまった部分ができた段階でウェブサイト作りに移行した。また学生からフィードバックを得るためのプロトタイプには、このサイトの特徴を一番よく表現する（３）と（６）の一部を優先的に具体化する方向で開発を行った。

#### 開発過程での問題点と今後の課題

テキスト執筆の段階でまず問題となったのが、関西弁自体の地域差である。例えば動詞の否定形を作る場合、京滋方面では「行かへん」のように、「ない」を「へん」で置換した形が一般的だが、阪奈方面では「行けへん」のように可能否定と同じ形を取る。また、語尾も「へん、ひん、ん」など地域差及び個人差がある。また同じ形であったとしてもそのアクセントにも地域や年代による差が存在する。しかし、このサイトの目標は関西文法の詳細を示す事ではなく、学習者がそれを動詞の否定形と認知できる事が目標なので、例示や練習に使う形は「現代の大阪または京都」中心に一般に使われる形を用い、地域差等の詳細には説明内で触れるのみにした。

次に音声録音であるが、例文や発話練習・聞き取り練習の為の音声ファイル量が莫大であることから、大半は我々自身が録音を行った。しかし会話部分などで男女差や声質に差が必要な場合が多く、今回は Audacity でピッチを調整する事により代用したが、将来的には「ネイティブ」の音声に置換して行くのが適当であろう。

同様の問題は (3) の各課の冒頭に示すモデル会話ビデオでも言える事である。親子の会話、夫婦の会話などを含むにもかかわらず、時間等の関係で全て開発者の出演でパイロットプログラムとしてのビデオ取りを行ったのであるが、これも将来的にはその役割に相当する人々の出演した物に置き換えるべきであろう。

(5) に用いる会話の録音での一番の問題は、街頭録音の為こちらのコントロールが利かなかった事である。全くの自然会話は学習者にとって道の情報が多すぎて学習者への聞き取りとして用いるのには不適當な為、会話自体の自然さと教材としてのバランスが今後の課題となった。また撮影者の技術・経験不足から来る音声や画像上の問題もあり、質的には練習に適しているとは言い難い。今後追加撮影を行う際にはこのような反省点を踏まえた上で行うべきである。

(6) のインタビューでも (5) の撮影時と同様に、発話がこちらのコントロールできない方向に向かうという問題が (特に年配者へのインタビューの場合) 見られた。それ以上に予想外であったのが、各インタビュー対象者の発話の方言度である。インタビュアーとの関係が疎遠である場合、発話スタイルは関西弁アクセントの敬体になるのだが、関西弁の伝統的特徴が敬体で強く出たのは年配者のみであった。職種にも寄るであろうが、仕事を通し標準語的敬体を使う機会が多い場合はアクセント以外の特徴は限られた部分 (話の引用など) にのみ見られる場合がほとんどであった。また、普段常体で話す近親者や友人であっても、インタビューと言う形式の為言葉まで畏まり、敬体になってしまったケースや、子供の場合はテレビの影響を受けて一部の語彙が標準アクセントになっているケースも見られた。しかし関西話者の現状を示すという点で、方言度の強いものから弱いものまで様々な発話データがそろったのは返って学習者にとっては有益ではないかとも考えられる。また方言度の弱い発話クリップ、つまりアクセントのみが関西で構造は標準語と類似したいわゆる「ネオ方言」的クリップは、学習者に関西弁文法知識がなくても今までの日本語文法知識のみで十分対応できるクリップであり、逆にそこから聞き取り練習を始めて、徐々に方言度の強いものに移行していくという学習方法も考えられる。そのような意味でクリップに示した「方言度」は学習者にとって有効な指標となるであろう。また、インタビュー対象者はそれぞれに個性的で、発話内容にも個性が出ており、特定の発話者に興味を持ってそのクリップをソート収集し視聴する事も、学習者の意欲を促し、更にそのインタビューの発話タイプの観察 (男言葉女言葉、若者言葉、幼児語等) や地方アイデンティティー考察もできるという点で有益な学習法なのではないかと考えられる。

実際のウェブサイト構築であるが、当初の予定よりも構成が複雑化し、担当者のみによる開発は不可能となったため、新たにプログラマーを増やす事となった。しかし (1) Word document の原稿からのフォーマット変換に時間を要する事、(3) のインターアクティブ聞き取り練習に複数の種類をそろえたため、プログラミングが複雑化した事、及び (6) のクリップ数が数百と予想以上の数になりうる事などから、構築スケジュールにも少々遅れが生じている。しかし 2007 年夏には (3) 及び (6) のプロトタイプが完成予定であり、完成次第、学習者数名に使用してもらった上で意見を聞き、更なる改良を重ねる予定である。

#### 今後の展望

ここで紹介したプロジェクトでは、学習者が関西弁の文法構造をインターアクティブな練習を通して学習後、実際のインタビューからの自然発話クリップをもとに、個別の表現の例や個別の発話者の例を検索して更に学べるスタイルを具体化する事を目標とした。今後は前章で示した課題の解決、及びプロトタイプへの学生のフィードバックを吟味して改良を重ね、更に「学習者

参加型のページ」構築を通じてオープンエンドで素材を学習者が増やしていけるサイトに持って行ければと考えている。また、このサイト開発で用いた手法は、学校カリキュラム内では紹介が困難な「マイナー言語・文化」を学習者主導でしかも生きた形で学べるという点で、他の地方文化・方言学習、ひいては日本語及び日本文化の多様性を学ぶ教材開発に広く応用可能ではないかと考えられる。

引用文献

山下良孝 関西弁講義 2004

真田信治 地域語のダイナミズム、1996

真田信治、庄司博史 日本の他言語社会 2005

尾上信介 大阪ことば学 1999

岡本牧子、宇治原庸子、山本修 聞いて覚える関西（大阪）弁入門 アルク 1998

